

岸和田随想

我が街は今や秋の地車祭り一色である。そんな折私の方は、先ずは迫り来る社中展の作品づくり、メ切り間近故の編集仕事、そして“天外”が仕上がって来た時一緒に發送予定の為の添削、その他諸々の段取りとアレコレ成さねばならぬ仕事に大奮なのである。

何度か書いたが、実は小生、だんじり無くては夜も日もあけぬ地岸和田の産にあらず。隣接しながらも又違った文化圏(?)たる堺市の出身なのである。彼地では中秋の名月の頃、屈強にして潔き若者達が“ふとん太鼓”と称する目も彩なる一件(御輿と似つつも、比べるも愚かなる圧倒的重量感を有する)をへべらべら、べらしヨッショと、腹に響く大太鼓の調子もよろしく波打つが如くに担ぎ進んで行くのだが、その積み上げた真紅のふとん状(高さ七・八米もあるうか)の四隅、真白なる長尺大房がその太鼓の音と共に前後左右大きく優雅に揺れまわるのですヨ。

然るに世帯をこの地に移して以来三十有余年、右の如きに類する話は、ここ岸和田では人前口が裂けてもタブの禁句である。



ふとん太鼓(堺市百舌鳥八幡宮)

何しろこの地では一年中が祭りのリハーサル状態で、週末ともなれば、各町(数百米ごと)に存在する地車小屋で、自慢の見事なる白木彫り戦国絵巻を惜しむが如くチラ見せにその半身をのぞかせて、テケテン・テケテン、ドッド・ドッド・ドッド、ピーヒャラリと、倦むことなきお囃子トレーニングに明け暮れるのだが、夫々の町の小屋前には

必ずや幾人もの人々。主役たるお兄サン達に憧れてやまぬ健全なる児童、明らかに仕事の合間と覚しきおじさん、おばさん、そして盛んなりし日を懐かしむが如き爺さん、婆ちゃん。要するに老若男女があるいは小椅子を持ち出して、はた自転車に跨がったまゝと、思い思いの体で日がな一日見守り続けるのである。しかも夫々が何とも仕合わせそうな誠によるしき顔つきで御座る。

また、我が家でもふと気がつけば、山と積まれた日常使いのタオルその殆どが派手な絵柄紋、色合いにして〇〇町と堂々染め抜いた正にご当地仕様そのものという按配なのである。

しかして、この地に在って地車無関心はゆめ許され難くもゆゝしき大事なのである。それにしても冒頭述べたこの時節、もしや小生本物の岸和田っ子なりせば、色々な仕事何れもこれ手につかぬ状況と相成ろうし、あるまいことか斯く駄文を草する暇とてあるまいし、だいいち忽ち神罰も下ろうかというもの。況やあしで會展作品の

一点たりとて仕上がりますまい。遠く近くだんじり囃子を聞きながら、この密かなる幾日かに、目論む作品づくりと山積のノルマ仕事をやり遂げねばと己に鞭打つの心底なのである。

と取り敢えず、先ずはこの原稿にて一時の責めは塞ぎ得た…か。



岸和田だんじり祭り